

家族機能の認知が内在化・外在化問題に及ぼす影響 ——ゆるし傾向性を媒介変数として——

林 祐希* 石田 靖彦**

*卒業生

**学校教育講座 (心理学)

Influence of Perceived Family Functions on Internalizing and Externalizing Problems: Mediating Effect of Dispositional Forgiveness

Yuki HAYASHI*, Yasuhiko ISHIDA**

* Graduate Student, Aichi University of Education, kariya 448-8542, Japan

** Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

本研究の目的は、家族機能の認知が、ゆるし傾向性を媒介変数として内在化・外在化問題に与える影響を検討することであった。仮説として、1. 家族機能が良好であると認知している人ほど、ゆるし傾向性が高い、2. 自己へのゆるし傾向は内在化問題を抑制し、他者へのゆるし傾向は外在化問題を抑制する、を設定した。大学生 183 名を対象に、家族機能の認知、ゆるし傾向性、抑うつ感および日常的攻撃行動について質問紙調査を行った。仮説モデルに従ってパス解析を行ったところ、家族機能からゆるし傾向への影響はほとんど認められなかったが、自己への消極的ゆるし傾向が高い人は抑うつ気分が低く、活動性や楽しみが高いこと、他者へのゆるし傾向が高い人は間接的対人攻撃が低いことが明らかとなった。このことから、自分の失敗をゆるせず自己を責め続けてしまう人は内在化問題に向かいやすいこと、他者への寛容さに欠ける人は外在化問題に向かいやすいことが示唆された。

キーワード：家族機能の認知、ゆるし傾向性、内在化・外在化問題

I 問題と目的

青年期は、家庭や学校のような閉鎖的な子どもの社会から開放的な大人社会への過渡期である。この時期において、新たな社会へ適応することができるかが重要な課題の一つである。この課題をうまく達成できるように影響を与えている要因として家族機能がある。

Olson (1986) の円環モデルによると、家族機能は「凝集性」「適応性」「コミュニケーション」の3次元で捉えることができる。凝集性は主に、情緒的な結びつき、家族成員間におけるお互いの関与の程度といった要素によって構成される。凝集性は低いほうから「遊離」「分離」「結合」「膠着」の4段階に分けられ、「遊離」に近い家庭ほど家族同士の関係性は悪いとされる。適応性は主に、リーダーシップ、規律、話し合いのスタイルといった要素により構成される。適応性は低いほうから「硬直」「構造化」「柔軟」「無秩序」の4段階に分けられ、「硬直」に近い家庭ほど家族同士の関係性は悪いとされる。3つ目の次元であるコミュニケーションは、凝集性と適応性の両次元を促進させる促進次元

であり、円環モデルには図示されない。本研究で扱うFACESIII (Olson, 1986) は、家族機能の認知について、凝集性と適応性の2つの次元で測定するものである(立山, 2007)。

西出・夏野(1997)によれば、家族機能の認知は中学生の抑うつ感に影響を与えることが示されている。また両親の夫婦間葛藤が深刻な家庭では、間接的にはあるが青年の抑うつ傾向が高められることが明らかにされている(川島・眞榮城・菅原・酒井・伊藤, 2008)。

これらの研究の結果から、家族がうまく機能していると認知している人ほど、抑うつといった内在化問題が低いといえる。ただし、攻撃行動といった外在化問題は扱われておらず、家族機能の認知が内在化・外在化問題に対して、それぞれどのような影響を及ぼしているかは明らかでない。

石川・濱口(2007)は、青年期の内在化・外在化問題について、問題が外在化するか内在化するかを左右する要因の一つとして、「ゆるし傾向性」という概念を提出している。ゆるし傾向性とは、海外で検討されて

いる forgiveness という概念を、個人の傾向性として捉え直したもので、「知覚された被害・侵害によって生じた反応を、ネガティブなものからポジティブ、ニュートラルなものに意識的に変化させようとする認知的傾向」と定義される(石川・濱口, 2007)。ゆるし傾向性は、ゆるしを与える対象によって大きく2つに分けられる。ひとつは、ゆるす対象が他者である場合で、他人に対して寛容であることを表す。もう一つは、ゆるす対象が自分である場合で、自分の過去の失敗や挫折を前向きに受け止め、ありのままの自分を受け入れることができることを表す。石川・濱口(2007)は、この2つのゆるし傾向と内在化・外在化問題との関連について検討し、他者へのゆるし傾向は、内在化問題よりも外在化問題と強く関連し、自己へのゆるし傾向は外在化問題よりも内在化問題と強く関連することを明らかにした。このことから、自己および他者へのゆるし傾向が内在化問題と外在化問題を左右する一つの要因であることが示唆された。

ただし、日本においてゆるし傾向性を扱った研究は少なく、家族機能と内在化・外在化問題との関連について、ゆるし傾向性を踏まえた研究はほとんど行われていない。これまでの研究では、家族機能の認知と内在化問題には関連が示されており、ゆるし傾向性は内在化・外在化問題に影響することが示されている。したがって、家族機能の認知とゆるし傾向性の間にも何らかの相関関係があることが予想される。具体的には、家族関係が良好である場合は、他者や自らの失敗に関して寛容になり、ゆるし傾向性が高くなる可能性が考えられる。

そこで本研究では、青年の家族機能の認知が外在化・内在化問題に及ぼす影響について、ゆるし傾向性を媒介要因に加えて検討する。

仮説については、これまでの議論を踏まえ、以下の2つの仮説を設定した。

仮説1: 家族機能を良好であると認知している人ほど、自己や他者へのゆるし傾向が高いだろう。

仮説2: 自己へのゆるし傾向は内在化問題を抑制し、他者へのゆるし傾向は外在化問題を抑制するだろう。

II 方法

2.1. 調査対象者と調査時期

大学生183名(男性63名、女性114名、その他6名)を対象に質問紙調査を行った。調査目的を説明して同意を得た上で、個人が特定されないように匿名で行った。調査時期は、2020年10月~11月であった。

2.2. 調査内容

(1) 家族機能の認知

立山(2007)の家族機能測定尺度(FACESIII)邦訳版20項目を使用し、「凝集性」「適応性」の2側面について「1. まったくない」~「5. いつもある」の5件法

で回答を求めた。

(2) ゆるし傾向性

石川・濱口(2007)のゆるし傾向性尺度23項目のうち14項目を使用した。下位尺度である「他者へのゆるし傾向」「自己への消極的ゆるし傾向」「自己への積極的ゆるし傾向」の中から因子負荷量の高い上位4~5項目を抽出し、各項目について「1. いいえ」~「4. はい」の4件法で回答を求めた。

(3) 内在化問題

自己記入式抑うつ評価尺度の短縮版(並川他, 2011)9項目を使用した。「抑うつ気分」「活動性及び楽しみの減退」の2つの下位尺度で構成される。「最近2週間の状態」に限定して、「1. そんなことはない」「2. ときどきそうだ」「3. いつもそうだ」の3件法で回答を求めた。

(4) 外在化問題

日常的攻撃行動尺度(石橋・桐生, 2019)を使用した。この尺度は「直接的対人攻撃」「間接的対人攻撃」「対物的攻撃」の3つの下位尺度で構成されるが、下位尺度の項目数にばらつきがあったため、表現を修正した11項目を使用した。「最近2週間の状態」に限定して、「1. まったくあてはまらない」~「5. 非常によくあてはまる」の5件法で回答を求めた。

III 結果

3.1. 尺度の検討

(1) 家族機能の認知

家族機能測定尺度(FACESIII)邦訳版20項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況は7.20, 1.58, 1.00, 0.85...であり、固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から2因子が妥当であると判断した。プロマックス回転後の因子負荷は表1に示した。負荷量の高い項目から、第1因子は「凝集性」、第2因子は「適応性」とした。項目の分類基準は負荷量の絶対値が.35以上とし、それに満たない項目、もしくは同時に二つの因子で基準値以上の負荷を示す5項目は削除した。立山(2007)の調査では削除項目は示されなかったが、それ以外のほとんどの項目は同様に分類された。逆転項目を処理したうえで項目平均を算出し、各下位尺度得点とした(凝集性 $M=3.09, SD=0.81$; 適応性 $M=3.13, SD=0.72$)。項目削除後の α 係数は「凝集性」で.91、「適応性」で.81であった。

(2) ゆるし傾向性

ゆるし傾向性尺度14項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況は4.65, 2.62, 1.55, 0.78...であり、固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から3因子が妥当と判断した。プロマックス回転後の因子負荷は表2に示した。第1因子は「自己への消極的ゆるし傾向」、第2因子は「自己への積極的ゆるし傾向」、第3因子は「他者へのゆるし傾向」とした。因子

表1 家族機能測定尺度の因子分析結果（主因子法、プロマックス回転後）

項目	I	II
「凝集性 ($\alpha=.91$)」		
3. 私の家族は、みんな一緒に何かをするのが好きである	.93	-.21
7. 何かをするときは、家族みんなでやる	.81	-.12
8. 私の家族は、みんなで一緒にやりたいことがすぐ思いつく	.79	.01
6. 家族の誰もが、お互いに強い結びつきを感じている	.75	.10
10. 私の家族はよくまとまっている	.74	.03
5. 私の家では、自由な時間を家族と一緒に過ごす	.68	.05
15. 私の家族は、いろいろな事についてよく議論する	.61	.06
4. 他人同士よりも、家族同士の方が親しみを持てる	.56	.19
9. 私の家では、何かを決めるとき、家族の誰かに相談する	.48	.24
「適応性 ($\alpha=.81$)」		
16. 私の家では、子どもが自主的に物事を決める	-.18	.73
12. 私の家族は、子供の意見を聞きつつ、しつけをしている	.05	.72
11. 家族の問題を解決する際には、子どもの意見も聞き入れられる	.13	.68
13. 家族を引っ張っていく者（リーダー）は、その時々状況に応じて変わることがある	.01	.60
14. 私の家族では、何か問題が起きたとき、その取り組みを柔軟に変えられる	.20	.57
18. 私の家では、必要に応じて家事を分担する	-.03	.46
17. 家族内の決まりごとは、その時々に応じて変わる	.01	.42
(残余項目)		
1. 私の家族では、困ったとき、お互いに助け合う		
2. 私の家族は、お互いの友人を大切にしている		
19. 私の家では、常に中心的存在の人がいる R		
20. 私の家では、家事の分担が決まっている R		
	因子相関 I	.67

注) Rは逆転項目を表す

分析による項目の分類は先行研究と同様であった。逆転項目を処理したうえで項目平均を算出し、各下位尺度得点とした（自己への消極的ゆるし傾向 $M=2.35, SD=0.80$; 自己への積極的ゆるし傾向 $M=2.93, SD=0.64$; 他者へのゆるし傾向 $M=2.45, SD=0.64$ ）。 α 係数は「自己への消極的ゆるし傾向」で.88、「自己への積極的ゆるし傾向」で.80、「他者へのゆるし傾向」で.76であった。

(3) 内在化問題

自己記入式抑うつ評価尺度9項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況は3.78,1.47,0.85,0.74…であり、固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から2因子が妥当と判断した。プロマックス回転後の因子負荷は表3に示した。因子分析による項目の分類は先行研究と同様であった。第1因子は「活動性・楽しみ」、第2因子は「抑うつ気分」とした。

各項目平均を算出し、各下位尺度得点とした（活動性・楽しみ $M=2.14, SD=0.48$; 抑うつ気分 $M=1.53, SD=0.51$ ）。 α 係数は「活動性・楽しみ」で.77、「抑うつ気分」で.80であった。

(4) 外在化問題

日常的攻撃行動尺度11項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況は3.73, 1.74, 1.34, 0.96…であり、固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から3因子が妥当と判断した。プロマックス回転後の因子負荷は表4に示した。第1因子は「対物的攻撃」、第2因子は「直接的対人攻撃」、第3因子は「間接的対人攻撃」とした。負荷量の絶対値が.35以上という基準で項目を分類し、各項目平均を算出し、各下位尺度得点とした（対物的攻撃 $M=2.85, SD=1.05$; 直接的対人攻撃 $M=2.46, SD=0.95$; 間接的対人攻撃 $M=$

表2 ゆるし傾向性尺度の因子分析結果（主因子法、プロマックス回転後）

項目	I	II	III
「自己への消極的ゆるし傾向 ($\alpha=.88$)」			
6. うまくいかないことについて、自分を責め続けてしまう R	.88	.03	-.05
7. 以前の自分の失敗のことを考えると、今でも落ち込んでしまう R	.81	-.17	.16
8. 何かできないことがあると、いつまでも自分に腹を立ててしまう R	.74	.10	.00
9. 自分の失敗のことで、いつまでも悩むことはない	.72	.08	.12
5. 思うように上達しないことがあると、自分を責め続けてしまう R	.71	.04	-.11
「自己への積極的ゆるし傾向 ($\alpha=.80$)」			
11. 何か失敗したとしても、自分は頑張ったと考えるようにしている	.04	.78	-.08
13. 何か失敗したとしても、それは自分のためになると考えるようにしている	-.10	.73	.06
12. 努力が無駄になっても、その努力は自分のためになると考えられる	.02	.65	.08
10. 失敗しても一生懸命頑張った結果なら、自分をほめるようにしている	.04	.63	.04
14. 何か失敗したとしても、自分には他にいいところがあると考える	.28	.42	-.14
「他者へのゆるし傾向 ($\alpha=.76$)」			
1. 以前、自分に嫌な事をした人にも、親切にしようと思う	-.10	.10	.77
3. 以前、自分に嫌な事をした人にも、今はやさしくしようと思っている	-.12	.13	.71
2. 以前、自分に嫌な事をした相手と仲良くする気にならない R	.18	-.14	.66
4. 自分を傷つけた相手には、何か嫌な事が起きればいいと思う R	.15	-.01	.58
	因子相関 I	.48	-.16
	II		.14

注) Rは逆転項目を表す

表3 自己記入式抑うつ評価尺度の因子分析結果（主因子法、プロマックス回転後）

項目	I	II
「活動性・楽しみ ($\alpha=.77$)」		
5. いつものように何をしても楽しい	.73	-.02
6. 元気いっぱいだ	.72	-.06
7. 楽しみにしていることがたくさんある	.67	.08
9. 遊びに出かけるのが好きだ	.63	.09
8. やろうと思ったことがうまくできる	.40	-.10
「抑うつ気分 ($\alpha=.81$)」		
1. とても悲しい気がする	.06	.93
2. 泣きたいような気がする	.14	.81
3. ひとりぼっちの気がする	-.17	.55
4. 生きていても仕方がないと思う	-.31	.45
	因子相関 I	-.49

2.65, $SD = 0.90$)。因子分析による項目の分類は、残余項目が示されたことを除いて先行研究と同様であった。

項目削除後の α 係数は「対物的攻撃」で.80、「直接的対人攻撃」で.79、「間接的対人攻撃」で.72であった。

表4 日常的攻撃行動尺度の因子分析結果（主因子法、プロマックス回転後）

項目	I	II	III
「対物的攻撃 (α=.80)」			
9. いらいらしたときに、物を雑に扱うことがある	.90	-.01	.05
10. 嫌な事があったときに、物を雑に扱うことがある	.88	.06	-.08
11. 身体的余裕がない（寝不足・疲労など）ときに、物を雑に扱うことがある	.52	-.05	-.01
「直接的対人攻撃 (α=.79)」			
3. ばかにされたときに、怒って相手に直接文句を言うことがある	-.04	.86	-.03
2. 嫌な事をされたときに、相手に対して直接怒りを表現することがある	-.07	.76	.04
1. いらいらしたときに、相手に直接強い口調で怒ることがある	.23	.58	.06
「間接的対人攻撃 (α=.72)」			
6. いらいらしたときに、相手がいないところで文句を言うことがある	.09	-.12	.83
5. むかついたときに、陰で悪口を言うことがある	.00	.04	.80
8. 相手の行動を哀れに思ったときに、ばかにすることがある	-.18	.23	.45
(残余項目)			
4. いらいらしたときに、舌打ちをすることがある			
7. 苦手な人に対して避けるよう行動する			
	因子相関 I	.30	.51
	II		.28

3.2. 仮説モデルの検討

本研究で設定した仮説にしたがって、変数間にパスを設定した。仮説1については、家族機能の認知における「凝集性」「適応性」から「自己への消極的ゆるし傾向」「積極的ゆるし傾向」「他者へのゆるし傾向」へのパスを設定した。仮説2については、「自己への消極的ゆるし傾向」「積極的ゆるし傾向」「他者へのゆるし傾向」から「対物的攻撃」「直接的対人攻撃」「間接的対人攻撃」「抑うつ気分」「活動性・楽しみ」へのパスを設定した。有意でないパスを削除しモデルの適合度を確認しながらモデルを改善し、最終的に図1に示すモデルを採用した。最終的なモデルの適合度はGFI=.923、AGFI=.853、RMSEA=.040であった。男女別のパス係数を図1に示す。

家族機能の認知からゆるし傾向性への影響については、男性において、家族機能の凝集性から自己への消極的なゆるし傾向への負のパスが有意となった ($\beta = -.32, p < .01$)。ただしこの結果は、仮説1の予測とは逆の結果で、同様のパスは女性では有意とはならなかった ($\beta = -.03, ns$)。それ以外に、家族機能の認知からゆるし傾向性への有意なパスは認められなかった。したがって、仮説1は支持されなかった。

ゆるし傾向性から内在化・外在化問題への影響については、男女とも、自己への消極的なゆるし傾向から

抑うつ気分への負のパス (男性 $\beta = -.34, p < .01$; 女性 $\beta = -.55, p < .01$)、自己への消極的なゆるし傾向から活動性・楽しみへの正のパス (男性 $\beta = .34, p < .01$; 女性 $\beta = .39, p < .01$) が有意となった。自己への積極的なゆるし傾向からは有意なパスは示されなかった。

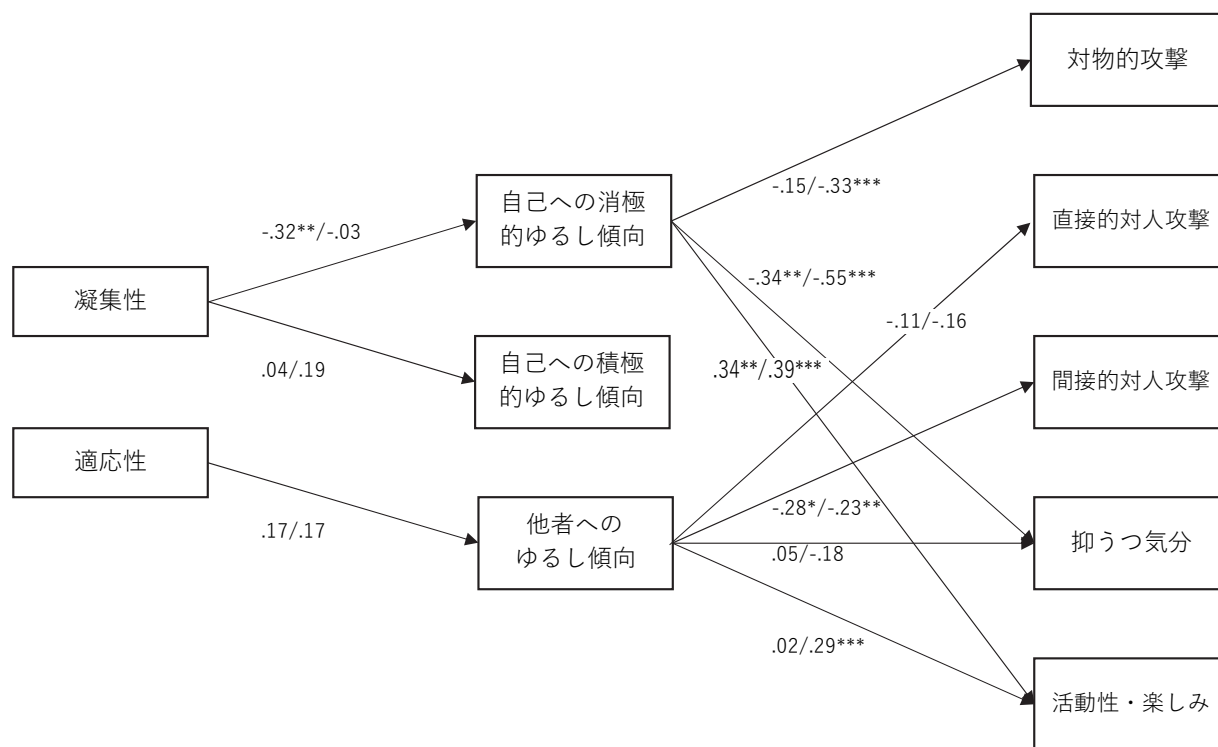
他者へのゆるし傾向については、男女とも、間接的対人攻撃への負のパスが有意となった (男性 $\beta = -.28, p < .05$; 女性 $\beta = -.23, p < .05$)。このことから、自己へのゆるし傾向は内在化問題を抑制し、他者へゆるし傾向は外在化問題を抑制するという仮説2は、自己への積極的なゆるし傾向以外は、支持されたといえる。

その他、女性において、自己への消極的なゆるし傾向から対物的攻撃へ負のパス ($\beta = -.33, p < .001$)、他者へのゆるし傾向から活動性・楽しみへの正のパス ($\beta = .29, p < .001$) が有意となったが、パス係数の男女差について、多母集団同時分析を用いて検討したところ、いずれのパスでも男女に有意な違いは見いだせなかった。したがって、仮説モデルにおける男女の違いはあまり大きくないと考えられる。

IV 考察

4.1. 家族機能の認知がゆるし傾向性に与える影響 (仮説1の検討)

家族機能の認知がゆるし傾向性に与える影響につい



$\chi^2=74.087, df=58, p=.076$
 GFI=.923, AGFI=.853, RMR=.044, AIC=.178.087, RMSEA=.040

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$
 男性/女性

図1 家族機能の認知がゆるし傾向性を媒介として内在化・外在化問題に至る仮説モデルの分析結果
 注) 図の煩雑さを防ぐため誤差変数、および独立変数間の相関は省略した

では、男性において、家族の凝集性を高く認知している人ほど、自己への消極的なゆるし傾向が低かったが、この結果は仮説とは逆の結果であった。それ以外に、家族機能の認知からゆるし傾向性への有意な影響は示されなかった。よって仮説1は、支持されなかった。

このように家族機能の認知がゆるし傾向性にはほとんど影響していなかった点については、第一に、調査対象が大学生であったことが挙げられる。大学生は家族から精神的に独立しており、家族からの影響が見いだせなかったのかもしれない。

第二に、本研究では、家族機能が悪い状態の調査対象者が少なかったことが挙げられる。実際、家族機能測定尺度の質問項目で「まったくない」と回答した人は10%に満たなかった。この結果から、凝集性や適応性が低い、いわゆる家族機能が良好でないサンプルが不足していた可能性が示唆される。今後は、家族機能に偏りが無いサンプルで検討する必要がある。

4.2. ゆるし傾向性が内在化・外在化問題に与える影響 (仮説2の検討)

ゆるし傾向性から内在化問題への影響については、男女とも、自己への消極的なゆるし傾向から抑うつ気分への負の影響と活動性・楽しみへの正の影響が認められ、自分の失敗をゆるせず自分を責め続ける人は、内在化問題を抱えやすいことが示された。自分の失敗

をゆるせない人は、ストレスを内側にため込みやすく、抑うつなどの内在化問題を高めてしまうと考えられる。同様の結果は、石川・濱口 (2007) でも示されており、自己へのゆるし傾向が内在化問題を抑制するという仮説2を支持する結果であった。

一方、ゆるし傾向性から外在化問題への影響については、男女とも、他者へのゆるし傾向から間接的攻撃への負の影響が認められ、他者に対して寛容な人は、他者に対する間接的な攻撃行動が少ないことが示された。この結果は、他者へのゆるし傾向は外在化問題を抑制するという仮説2を支持するものである。

このように、本研究では、おおむね仮説2を支持する結果が示されたが、予想とは異なる結果も示された。一つ目は、自己への積極的なゆるし傾向が内在化問題に及ぼす影響が示されなかった点である。中高生を対象にした石川・濱口 (2007) では、自己への消極的なゆるし傾向だけでなく、自己への積極的なゆるし傾向も内在化問題に影響を及ぼしていた。本研究の調査対象は大学生であり、大学生と中高生の違いが結果に反映されたのかもしれない。

二つ目は、他者へのゆるし傾向から直接的な対人攻撃へ影響がほとんど見られなかったことである。これについても、本研究の調査対象が大学生であったことが関連している可能性がある。中高生を対象とした石

川・濱口 (2007) では、他者へのゆるし傾向と関連が強かったのは、間接的な攻撃である「関係性攻撃」で、他人への直接的な攻撃である「身体的攻撃」とは関連が弱かった。大学生は中高生にくらべて直接的攻撃はさらに少なくなると考えられるため、他者へのゆるし傾向から直接的対人攻撃への影響が示されなかったのかもしれない。

4.3. まとめと今後の課題

本研究では、ゆるし傾向性を媒介変数として、家族機能の認知が外在化・内在化問題に与える影響について検討した。その結果、家族機能の認知がゆるし傾向性に及ぼす影響はほとんど示されなかったが、ゆるし傾向性が内在化・外在化問題に及ぼす影響は示された。

家族機能の認知の影響がほとんど示されなかった点については、本研究の対象者が大学生であったこと、家族機能が良好でない対象者が少なかったことなどが関連していると考えられた。

今後の課題としては、家族機能が良好ではない対象もサンプルに加えて検討すること、中高生と大学生を比較することなどが挙げられる。

引用文献

- Olson, D. H. (1986). Circumplex Model VII: Validation Studies and FACES III. *Family Process*, 25, 337-351.
- 石橋加帆・桐生正幸 (2019). 日常的攻撃行動尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 日本心理学会第 83 回発表論文集, 128.
- 石川満佐育・濱口佳和 (2007). 中学生・高校生におけるゆるし傾向性と外在化問題・内在化問題との関連の検討 教育心理学研究, 55, 526-537.
- 川島亜紀子・眞榮城和美・菅原ますみ・酒井 厚・伊藤教子 (2008). 両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連 教育心理学研究, 56, 353-363.
- 並川 努・谷 伊織・脇田貴文 (2011). Birlerson 自己記入式抑うつ評価尺度 (DSRS-C) 短縮版の作成 精神医学, 53 (5), 489-496.
- 西出隆紀・夏野良司 (1997). 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究, 45, 456-463.
- 立山慶一 (2007). 家族機能測定尺度 (FACESIII) 邦訳版の信頼性・妥当性に関する一研究 創価大学大学院紀要, 28, 285-306.

付記

本研究を実施するにあたり、多くの方々にご協力いただきました。とくに貴重な時間を割いて質問紙調査にご協力いただきました皆様に、深く感謝申し上げます。